「困難な時になすべきこと」イザヤ書　37 章 1-13 節

2024.1.21　礼拝

序論）

昨年の年間標語は「いつも喜び、祈り、感謝する教会」でした。祈るということは困った時だけではなく、いつも祈ることを聖書は教えていますが、そうはいっても実際、私達が祈る時というのは困った時が多いのではないでしょうか。

では、実際に困難な時に私達はどのように祈ったらよいのかを、みことばから教えられていきたいと思います。

文脈）

36 章ではアッシリアから送り出された将軍ラブ・シャケが、ヒゼキヤやエルサレムの人の信仰を否定し、絶望させようと挑発している箇所でした。ラブ・シャケの挑発はヒゼキヤ王が直接聞いたのではなく 2 節にでてくる宮廷長官エルヤキム、書記シェブナ、およびアサフの子である史官ヨアフが聞いたことであり、ヒゼキヤはその部下たちからの報告を聞いて衣を引き裂き、粗布をまとった所から今日の箇所は始まっています。1 節をよみましょう

へりくだって【主】の前にでる）

37:1 ヒゼキヤ王はこれを聞くと衣を引き裂き、粗布を身にまとって【主】の宮に入った。

ラブ・シャケの挑発を聞いたヒゼキヤは、ラブ・シャケに対して一言も言い返すことをせず、【主】の前にでてへりくだりました。衣を裂き、粗布を身にまとうという行為は、悲しみと悔い改めを現す行為であり、ヒゼキヤはこの時、王としての自分の立場を捨てて、【主】の前に徹底的にへりくだったのでした。

彼がこの時、何を悲しみ、何を悔い改めたのかは、明確にかかれていないのでわかりませんが。【主】の民であるはずの自分たちが【主】の栄光を現せて居ないことに対する悲しみや、【主】ではなくエジプトに頼ってしまったことに対する悔い改めもあったのだと思います。

私達も何か困ったことが在る時、【主】に祈ります。自分や大切な人が病気になったとき、能登半島大地震のような出来事があったとき、仕事がうまく行かない時、経済的に厳しい時、様々な困った出来事が起こる時、私達は祈りますが、その時、私達は本当に【主】の前でへりくだって祈っているでしょうか。

私自身、祝子先生の病気や教会員の方々の様々な祈祷課題を聞く時に、それを覚えて祈らせていただいていますが、このみことばと向き合うとき、自分は果たして衣を引き裂き、粗布をまとうほどへりくだった姿勢をもって【主】の前に祈っているだろうか。と自分の祈りの姿勢を反省させられました。

みなさん、これは私の経験談になってしまいますが、祈りって本当に切実ないのりになる時、【主】の前に頭をあげて祈ることはなかなかできません。【主】の助けを切に求めれば求めるほど、【主】の前に体を小さくし、土下座をして祈らずにはいられません。そして、【主】により頼もうとするとき、自分の中に悔い改めなければいけないような罪があるとき、それを告白して【主】に赦していただかなければ、【主】に助けを求める祈りが祈れなくなるのです。

ヒゼキヤが悲しみと悔い改めを示す粗布をまとって祈ったのは、エジプトに頼っていた彼自身、【主】の前に深い悔い改めをしなければいけないという思いがかったからではないでしょうか。

また、ヒゼキヤ王が置かれた状況は、アッシリアの将軍とその軍隊が目の前まで来ている状況なわけですから、本来は神殿でお祈りなんてしていられない状態です。でも、彼は王として陣頭指揮をするよりも、【主】の前でへりくだり、徹底的に【主】に祈ることを優先したのです。

みなさん、これが信仰者の問題解決のための優先順位なのです。みなさんの中に本当に解決するべき問題があるのならば、みなさんの社会的立場を捨て、見栄を捨て、【主】の前に徹底的にへりくだり、悔い改めるべきところを【主】の前に告白して、【主】に祈る者となりましょう。

預言者にとりなしを求める）

2 節と 4 節の後半を読みます

37:2 彼は、宮廷長官エルヤキム、書記シェブナ、年長の祭司たちに粗布を身にまとわせて、預言者である、アモツの子イザヤのところに遣わした。

37:4b あなたは、まだいる残りの者のために祈りの声をあげてください。』」

ヒゼキヤは【主】の宮で祈ったあと、次に自分の部下たちにも粗布をまとわせ、預言者イザヤのところに遣わしました。この時にイザヤは既に 70 歳ぐらいになっていただろうといわれていますから、当時活躍していた預言者の中でも、最高責任者的な立場にいたのだと思います。それはつまり、イザヤは、もっとも【主】のみ言葉に精通し、もっとも御心を預言することができる存在だったということです。

ヒゼキヤはもっとも【主】と近い関係をもっていると思われるイザヤに自分たちが置かれている状況を伝え、とりなしの祈りを求めたのです。3 節を読みましょう。

37:3 彼らはイザヤに言った。「ヒゼキヤはこう言っておられます。『今日は、苦難と懲らしめと屈辱の日です。子どもが生まれようとしているのに、それを産み出す力がないからです。

ヒゼキヤは自分たちがまさに困難の真っ最中にあることを伝えています。しかも「子どもが生まれようとしているのに、それを産み出す力がないからです。」といっています。「子どもが生まれようとしている」というのは、まさに出産の真っ最中ということですね。私は男なのでその苦しみがどれほどのものか実際にはわかっていませんが。出産時の陣痛の痛みは「鼻からスイカが出るような痛み」とか、「ハンマーで殴られたような痛み」とか、「ダンプカーにひかれたような痛み」といった表現がよくされることから、想像を絶するような痛みなんだということがわかります。でも、そういった苦しみがあったとしても子どもが生まれたら。報われるのではないでしょうか。逆に子どもがいっこうに生まれずに、産みの苦しみだけがずっと続くとしたら、それは恐らく最悪な状況だといっていいと思います。

ヒゼキヤは 4 節で「残りの民」ということばを使っていますから、彼は恐らくイザヤから「残りの民の預言」を聞いていたのでしょう。「残りの民の預言」とは、最後まで【主】を信じ続ける者を【主】が救ってくださるという預言です。【主】はその預言を信じていたのだと思います。

【主】の救いという慰めが必ずある。でも、その【主】の救いを見るためには自分の力が足りなくて、今、苦しみだけが続いている。　そうゆうようなことをヒゼキヤは言いたいのでしょう。ヒゼキヤは信仰と無力さの中で揺れ動きながら、イザヤに助けを求めているのです。

私達は困ったことがあると祈ります。でも、祈っても、祈っても、その祈りが聞かれているように思えなくて、産みの苦しみがずっと続いているような状況になったことはないでしょうか。私は何度もあります。そして、その度に、自分の無力さを実感するのです。でも、その時に私達がするべきことは、信仰の友や信仰の先輩、そして、牧師や伝道師にとりなしの祈りを求めることなのです。

みなさんは後ろの階段のところに「とりなしの祈りポスト」があることを認識されていますか？　また、早天祈祷会や水曜祈祷会はとりなしの祈りをするときであ

ることを覚えておられるでしょうか。さらにはスマホを使っている人は、今は富川福音教会 LINE や日高キリスト教会 LINE がありますから、それらを用いてとりなしの祈りの要請をすることができます。もちろん、個人的に牧師にとりなしの祈りを求めて下さっても結構です。

みなさん、とりなしの祈りの要請をするという事は、聖書的なことなのです。ヒゼキヤのとりなしの祈りの要請は 4 節にも続いています。

37:4 おそらく、あなたの神、【主】は、ラブ・シャケのことばを聞かれたことでしょう。彼の主君、アッシリアの王が、生ける神をそしるために彼を遣わしたのです。あなたの神、【主】は、お聞きになったそのことばをとがめられます。あなたは、まだいる残りの者のために祈りの声をあげてください。』

ヒゼキヤは【主】が自分たちの置かれた状況、特にラブ・シャケがどのように【主】を冒涜したのか。すでに【主】が知っておられることを分かっていました。そして、その冒涜に対して、【主】がとがめられることも分かっていました。

それでも、彼がとりなしの祈りを求めていることに注目していただきたいと思っています。私達の【主】は全能の【主】ですから、私達がわざわざ祈りの声を挙げなくても、私達の状況を私達以上に知っておられるお方です。それでも、あえて祈るというのが聖書的な祈りの本質なのです。

みなさん、祈りの応答がなかなかないと思えても祈る。産みの苦しみがずっと続いているように思えてもいのる。既に知られていることであっても、あえて祈る。それが祈りの本質であり、とりなしの祈りの姿なのです。

みなさんは、そのように祈っておられるでしょうか。

【主】の応答）

ヒゼキヤからとりなしの祈りの要請がきたとき、イザヤは改めて【主】に答えを求めることなく、すぐに彼らに【主】からのみことばを伝えています。

それはヒゼキヤが言う通り、【主】がすでにすべてのことを知っておられ、イザヤに預言を与えておられたからです。【主】のことばを読んでみましょう。

37:6 イザヤは彼らに言った。「あなたがたの主君にこう言いなさい。『【主】はこう言われる。あなたが聞いたあのことば、アッシリアの王の若い者たちがわたしをののしった、あのことばを恐れるな。

【主】にとってアッシリアの王や、その将軍であるラブ・シャケは若い者・・・つまり、道理を知らない未熟者でしかありませんでした。
だから、彼らがどんなに【主】のことを馬鹿にし、軽んじたとしても「あのことばを恐れるな。」と言われています。
みなさん、【主】に祈り求めた者が次にするべきことは「恐れることをやめること」なのです。私達に襲ってくる困難は様々なことで私達を恐れさせようとします。でも、私達は、【主】に精一杯いのりもとめたのならば、あとは恐れることをやめて、【主】のみこころにすべてを委ねるだけなのです。

【主】はこのときのヒゼキヤに対して以下のように言われました。

37:7 今、わたしは彼のうちに霊を置く。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしはその国で彼を剣で倒す。』」

そして、この【主】のみことばは具体的に実現していきます。8 節

37:8 ラブ・シャケは退いて、リブナを攻めていたアッシリアの王と落ち合った。王がラキシュから移動したことを聞いていたからである。
37:9a 王は、クシュの王ティルハカについて、「彼があなたと戦うために出て来ている」との知らせを聞いた。

【主】はヒゼキヤに対して「彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。」といったように、アッシリアの王は、クシュの王ティルハカがアッシリアと戦うために出てきているという噂を引いて、ラキシュからリブナに移動をし、アッシリアの将軍のラブ・シャケもアッシリア王を追って退きました。
クシュというのはエチオピアのことですが、これはエチオピアの王がアッシリアと戦おうとしているという噂がたったというよりは、当時エジプトはエチオピアの傀儡政権だったので、エチオピアの傀儡になっていたエジプトの王がアッシリアと戦おうとして昇ってきているという噂が聞こえたということでしょう。
どちらにしても、【主】が言われた通り、アッシリアは噂に振り回され始めたのです。そして、アッシリアはこの状況はよくないと思ったので、急いでヒゼキヤに対して手紙を書き送り、彼らを降伏させようとしました。それが 10 節から 13 節の部分

37:10 「ユダの王ヒゼキヤにこう伝えよ。『おまえが信頼するおまえの神にだまされてはいけない。エルサレムはアッシリアの王の手に渡されないと言っているが。
37:11 おまえは、アッシリアの王たちがすべての国々にしたこと、それらを絶滅させたことを確かに聞いている。それでも、おまえだけは救い出されるというのか。
37:12 私の先祖は、ゴザン、ハラン、レツェフ、またテラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々は彼らを救い出したか。
37:13 ハマテの王、アルパデの王、セファルワイムの町の王、ヘナやイワの王はどこにいるか。』」

内容としては、以前ラブ・シャケが言った脅しと対してかわりがありませんが、12節と13節にあげられている町々は、北イスラエル王国の人々が、アッシリアの捕囚として連れて行かれた場所なので、ユダの兄弟国家である北イスラエルの破滅を思い出させて、ヒゼキヤの信仰をくじこうとしていることがわかります。

みなさん、私達が【主】によりたのみ、また、信仰の友にとりなしを祈り、そして、【主】を信じて「恐れることをやめた」時、敵対者はなおを私達の信仰をくじこうとしてくるのです。
しかし、そういった敵の攻撃も、私達がもっと【主】に祈るための原動力にできるのです。事実、このあとヒゼキヤはまた【主】の宮にいって祈りをはじめました。

まとめ）
みなさん、祈りこそが困難の時に私達がするべき第一のことなのです。
みなさんは、敵への反撃や自分の社会的な立場を捨てて、徹底的にへりくだって【主】に祈ることをされているでしょうか。本当に【主】の助けをもとめるのならば、罪があるならばそれを悔い改め、へりくだって【主】に祈り求めていきましょう。

また、【主】は私達が互いにとりなし祈れるように、祈りの友を与えてくださっています。ヒゼキヤがイザヤにとりなしの祈りを求めたように、私達も互いにとりなしの祈りを要請し、ともに祈りあう者となっていきましょう。
【主】はすべてを知っておられます。それでも、【主】に祈るのが祈りの本質です。祈ること、そして、とりなしの祈りを求めることを積極的にしていきましょう。
一部の人達だけが祈りもとめるのではなく、互いに祈りの要請をして、とりなし

の祈りが積極的になされる教会になっていきましょう。

　そして、自分でいのり、教会でいのったのならば、恐れることをやめましょう。【主】は恐れるなといわれるお方です。どんなに私達の心を惑わすもの、揺さぶるものがあったとしても、徹底的に【主】に祈ったあとは、【主】を信頼して恐れることをやめましょう。
　【主】は御言葉の通りに最後まで信じ続ける残りの民を助けてくださるお方です。